

雑誌における論文タイトル:

Breastfeeding and risk of febrile seizures in the first three years of life: The Japan Environment and Children's Study

和文タイトル:

3歳までの熱性けいれん発症リスクと母乳栄養期間の関連性について: エコチル調査より

ユニットセンター(UC)等名: 高知 UC

サブユニットセンター(SUC)名:

発表雑誌名: Brain and development

年: 2021

DOI: <https://doi.org/10.1016/j.braindev.2021.10.008>

筆頭著者名: 満田直美

所属 UC 名: 高知 UC

目的:

熱性けいれんは、38℃以上の発熱に伴っておこるけいれんで、発症には遺伝的な要因の関与が大きいほか、環境要因など複数の要因が関連しているといわれています。我々は環境要因の中でも乳幼児期の栄養方法に注目し、熱性けいれん発症リスクと母乳栄養期間の間に関連性があるかを検討しました。

方法:

熱性けいれんは、1歳から3歳までのいずれかの質問票で「熱性けいれんと診断されたことがある」と回答したものを「熱性けいれんの診断あり」としました。母乳栄養を行った期間は、質問票の回答に基づいて生後6か月まで、6～12か月、12～18か月、18～24か月、24か月以上の5群に分け、生後6か月までの群を対照として、各群の熱性けいれん発症のリスク比を修正ポワソン回帰分析を用いて算出しました。

結果:

解析の対象となった84,321人のうち、6,264人(7.4%)が3歳までに少なくとも1回は熱性けいれんを経験していました。母乳栄養期間が長くなるほど熱性けいれん発症リスクは低下する傾向があり、母乳栄養期間が6か月未満の群と比べ、24か月以上の群では調整リスク比が0.86(95%信頼区間 0.79–0.95)となっていました。完全母乳栄養と混合栄養の間には熱性けいれん発症リスクの差はみられませんでした。

考察(研究の限界を含める):

母乳栄養期間が長いほど、3歳までの熱性けいれん発症リスクが低下する傾向が示されました。しかし、熱性けいれん診断の情報は診療録からではなく家族から得ていること、熱性けいれんの持続時間やけいれんのタイプについての情報がないこと、熱性けいれんの家族歴についての情報がないことなどは研究の限界です。また、サンプルサイズ(解析の対象となった人数)が大きいことは研究の強みではありますが一方で注意点のひとつでもあります。つまり、サンプルサイズが大きいため統計学上の有意差が出ているものの、遺伝的要因や発熱頻度など、他の要因に比べると母乳栄養が熱性けいれん発症リスクに与える影響は少ないと考えられます。

結論:

本研究により、母乳栄養を長く継続することは、わずかではあるものの熱性けいれん発症リスクを下げる効果がある可能性が示唆されました。